

眼下に、街の灯りが輝いて拡がっていた。高卒五十年目の同期会は、悪友四人組の五十年ぶりの勢揃いであり、二次会でも彼らの話は尽きなかった。最近出来た駅前高層ビルの中層階にあるレストラン街に手頃な居酒屋があつて、そこに場を移したのであつた。

居酒屋の窓からは駅前広場を挟んで新幹線のホームが見え、「こだま」か「ひかり」かが停っている。「のぞみ」が走り抜けてゆく。窓の正面には、遙か向こうの海岸線に向け市街地の明りが続き、中ほどに高速道路の灯がひとときわ明るく左右に列をなしている。「それでな、さつきも言いかけてたんだけど」取り敢えずの注文をしたあと、二次会の余韻を繋ぐように望月が話の口火を切った。「今度の家移りじゃ、価値観がひっくり返っ

たよ、まったく」

望月は、高校の国語科教員を定年で終え、郷里、つまりこの地に引き上げるにあたって、それまで住んでいた首都圏近郊の家を手放すことにしたのである。同級生の山田忠、略して山^{やまちゆう}忠が、かつて学生運動に挫折して郷里に戻り不動産業をやっていたのであるが、その山忠のお陰で手頃な新居が見つかり、旧居の借り手もほとんど同時に決まった。

「引っ越し前にな、新しい家は狭いんだから物はできるだけ捨てると、これが大命題なんだ。最近はず捨離とかいうけどな。そのためには、親が残していった物はもちろん、子どもたちの物、自分の思い出深い物でも最大限捨てなきゃならん。新品に近い物でも使うか捨てるかゆっくり考えてる暇など無い」

「震災の救援物資にも、なかなか出せないんだよな」

銀行マンから食品会社社長に出向し、今は監査役になっている鈴木誠司が、この春の東

日本大震災を引合いに出した。鈴木姓がクラスには屢々複数いて、多くは名で呼ばれた。「誠司も経験したな。そうなんだよ。救援物資には、使い古しはダメ、個人では送るな、とか制限がメチャクチャあるんだよ」

「市役所に聞いてみりゃあ、受け入れ体制が十分でないから今はお引き受けしてないんです、などとくる。それをするのが役所だろう」

山忠も経験があるらしい。望月が続けた。「そうなんだよ。この一、二カ月で、俺たち

世代がガキの頃に培った、あのもったいない精神がずたずたにされてしまったってわけ。」
「不要になった陶磁器などを扱うという店に行けば、お宝探偵団にかかるような物でなきや、取り合ってくれない。バザーなんてのもあるけど、いつもやってるわけじゃないから、運が良くなきゃ、出せないしな」

そういう誠司の言葉に重ねて、望月は唾を飛ばしながら憤懣を叩きつける。

「市のリサイクル・センターに行けばだよ、

この机は使用感が強いからリサイクルに向かない。汚いってことなんだよ。資源ゴミにして貰おうと市のクリーン・センターに行けばよ、大半は撥ねられて、結局、可燃ゴミや不燃ゴミのピットに投込まされる。親が綿を打直しては作ってくれた布団なんか、羽布団に押されてさ、泣く泣くゴミとして投げ込む時の屈辱感。人生を否定された気分だよな」

企業の研究員だった青島が、片手を振って皆の話を制しながら、

「俺たちは：弁当箱の：：蓋の：飯粒を：：一粒残さず：：食うように：育ったん：だからな」といった。定年近く脳梗塞を患い、言語障害などの後遺症が残っているのである。

望月のいう屈辱感は、四人とも多少は経験している。時に同意を声にし、互いに頷いている。誠司が、夜空に灯りを点滅させて駆けるヘリコプターの姿を見つけ指差しながら、「津波の時、ヘリから送られた画像を覚えてるだろう。畑やビニールハウスを飲み込み、

トラックや家を押し流す映像は、シヨッキン
グだったが、その後から続々と伝えられる報
道は、信じられない事態の連続だった。それ
に、原発事故で故郷喪失ときた。今度の災害
で価値観が揺らいだ人は数知れないと思うが
と日本酒のグラスを口に運び、
「俺はね、思うんだが、価値観を変えさせら
れるようなことってのは、実は、今に始まっ
たことじゃないんだよな」

ヘリコプターは、窓の左寄りの丘陵地に散
らばる灯群を越えて視界から消えていった。
誠司は、その視界に映る丘陵地一帯の、卒
業以来の変貌を思い出すように語り始めた。
誠司のレクチャー癖は昔からのもので、高校
時代、マージャーンをしながらでさえ始まると
止まらなかつた。
その丘陵地の最下部に、県内有数の進学校
である彼らの高校がたっている。校庭の南一
帯は、彼らが学び遊んだ時代、茶畑とミカン
畑のつづく緩傾斜地だった。川が穿った谷に

は懸崖林が連なっていた。その川の上流、谷が尽きた先は高原状の地形をなし公園になっていたが、やがて動物園やホテルが出来た。昭和四十年代から開発の歩みが、傾斜地の裾からおおずおおずと上昇を始め、いくつかの住宅団地が造成された。五十年代には大学が懸崖林などを潰し移転してきた。その周辺に安アパートや商店街、飲食店街なども出来た。ブル期の後も低迷期でなく転換期だった。電車が走る沿線の区画整理と再開発が行われた。それらは、所得倍增計画以降の全国的経済成長のプロセスのこの街における姿だった。「とところで、山忠たちは、あの頃、世界同時革命なんていったな」と望月が誠司を遮って切り出すと、山忠が、走り去る「のぞみ」を追いながらいった。「それは、別の連中。僕たち、いや、少なくとも僕は、そういう言い方には賛成しなかった。三反主義といって、反帝、反独占、反スタを掲げていたのさ」

「その：反スタ：ってのは」と、青島が片手を振り振りいった。他の三人は、彼の片手が振られると敬意を表すように黙って聞いた。「歴史の上で：：き、きわめて重要だった：んじやないか。ソ連崩壊：以後、日増しに：：その意義が：：見えてきている：：。しかし、ゲバ棒：路線は：：正しい意味で：総括をせにやあ：国民から：許されんぞ」

「うん、そいつが難題なんだよな。死ぬまで苦闘が続きそう」と山忠が呻いた後、続けた。

「それはさておかせて貰ってだけどさ、反スタっていったとき、多くのセクトは反スタⅡ反日共だった。しかし、僕は、彼らと違って文字通りのスターリン主義に拘った。スターリン主義と言って共産党を指し、それを反帝、つまり反米や反独占と同列に置くのは次元が違うんだよ。わかる？ソ連で一九三〇年代に吹き荒れたスターリンによる粛清の嵐、農村破壊、領土拡張、自然改造などがマルクスの言う社会主義とどう折り合うのか、『資本論』

を素直に読んだだけで疑問に思った。社会主義の原点からの逸脱であって、それを進めることは歴史の冒とくではないかと……」

「そういえば、お前は、高校時代からむずかしい本をいつも読んでいたなあ」と望月。

「『経済学批判』なんてのを読んでたところを覚えてるよ。お前、理解できてたのか」

誠司が山忠に切り込んだ。

「重要なのはその『序説』ね。いずれにせよ、理解出来たかどうか。たとえ出来たとしても一部だけに過ぎないさ。マルクスのあゝした重くでっかい質感を飲み尽くすことなど無理。理解できたなんていう奴がいたら信用しない方が良い。僕の『資本論』は、おかげでずいぶんボロになった。これだけは事実だ」

「革命思想家もそこまで言えれば本物かもな」

誠司が、山忠の肩に手をかけていった。

「そんなことはどうでもいいと僕は思う」

「お待たせしました」と、店員が、注文していた茶そばを届けてきた。

「そういえば、高校の頃には、あそこの山に航空灯台があつて」と望月が窓の右側をのぞき込んで、

「ピカーリ、ピカーリつてやってたが、いつから無くなつたんだろう」といった。

「そういえば、いつの間にか消えてなくなつたなあ。技術革新で、航空灯台なんてものはいらなくなつたんだよ」

誠司が技術革新の歴史といった風なレクチャーを始めた。誠司の話には時に飛躍があつたけれど、かえつて要所をつかんでいて胸に落ちるところがあつた。話が進む間、他の三人は茶そばを啜つた。

「技術革新なんていうけどよ、結局、大量生産・大量消費・大量廃棄というわけさ。さっきの望月の嘆きもこの高層ビルも、そういう資本主義の必然的プロセスの挙句さ」

レクチャーは続いた。

「近年はよ、新自由主義規制緩和路線がアメリカから始つてさ、世界に新しい道を開いた

ように見えた。いくらも経たないうちにリーマンショックだ、ヨーロッパ諸国の経済不安だ、日本は円高不景気続きさ。その中で、独り元気なのが『博打うち』、つまり金融投機家だ。今、彼らは、一晩に四百兆円を動かしている。これがどんな額だか、考えてみる」

誠司のレクチャーは止まりそうもなかった。そこへ、望月が割って入った。

「でもな、今の情勢を見るとな、世界革命は、同時革命かどうかは別にして、真実味を帯びて来ているように思えるなあ。アラブの春、そして欧米の若者が、中国の若者が、ネットを使って手を結び始めた。これは、注目して良い流れかもしれない。中南米じゃ、あつちこつちでアメリカ離れだけじゃなくて新しい社会主義をめざそうという国まで出ている。アジアも、それぞれ元気だし、日本のアメリカ一辺倒だけが孤立して見える。そのうちに、世の中、何か思いがけないことが起こるかもしれないぞ」

山忠はにやにやしながらうなずいている。
青島が、片手をあげて発言の意志を表す。

「一歩：：一歩だよ。それが：：自然：：法
則なら、紆余曲折：：あつてもいつかは：：
貫かれるさ」

「さあ、結論が見えたところでお開きとしよ
うぜ」

望月の一言を潮に、みんな、それぞれ財布
に手をやりながら立ち上がった。

「でも、資本の側は必死だぞ。剰余価値つて
のはな、こんな美味しいものないんだからな、
一度食ったら止められない。手強いさ」

会計をまとめながらも誠司は続けている。
「もうひとつ：：民主主義：：の徹底だね」
「民主主義ねえ、それが全ての原点か。まあ、
次回のお楽しみだな」

望月がいつつ青島をさりげなく支え四人
は店を出た。彼らの歩みには、酔いや年寄り
めいた気配のほか、一歩一歩を踏みしめて
きたという自信めいた気配が漂っていた。